

出エジプト記2章「世の流れに逆らう信仰」

1A 王を恐れない勇氣 1-10

1B 信仰による行動 1-3

2B ファラオの娘にある神の配剤 4-6

3B 幼い時の信仰 7-10

2A 楽しみより苦しみを選ぶ決断 11-15

1B 救出の試み 11-12

2B 同胞の喧嘩 13-15

3A 小さなところに留まる謙虚さ 16-25

1B 困窮者の救出 16-19

2B 結婚生活 20-22

3B 神の時と準備 23-25

本文

出エジプト記2章を開いてください。私たちは前回から、出エジプト記を読み始めています。出エジプト記、特にその前半部分は、「世からの贖い」というテーマがあるということをお話ししました。エジプトというものが、聖書ではキリスト者にとっての世の豊かさや知恵、富を表していて、そこから贖い出されるイスラエルの民に、私たちも接ぎ木されている話をしました。そして、前回、世における苛酷さを見ました。イスラエルの民に対してファラオが苛酷な労役を課し、ついに生まれて来る男の子を殺せという命令をファラオが助産婦たちに出しました。しかし、助産婦はその命令に従わず、男の子を生かしたのですが、するとファラオは次になんと、ヘブル人の男の子はみなナイル川に投げ込まなければいけないと命じたのです。なんとという恐ろしい命令でしょうか？当時、ヘブル人の赤ん坊の死体が、ごろごろナイル川に浮かんでいたのではないかと思います。

この世の背後には、悪魔がいます。悪魔は、人を殺し、滅ぼすことを専らの意図としています。この世の流れに対して対抗するのは、私たちに与えられている信仰なのだとことを学びます。

1A 王を恐れない勇氣 1-10

1B 信仰による行動 1-3

1 さて、レビの家のある人がレビ人の娘を妻に迎えた。2 彼女は身ごもって男の子を産み、その子がかわいいのを見て、三か月間その子を隠しておいた。3 しかし、それ以上隠しきれなくなり、その子のためにパピルスのかごを取り、それに瀝青と樹脂を塗って、その子の中に入れ、ナイル川の岸の葦の茂みの中に置いた。

モーセの両親が、レビの家のある人、またレビ人の娘と紹介されています。6章には、父がアムラムであり、母がヨケベテであることが書かれています。ヤコブが晩年に十二人の息子に祝福した時は、レビは、シメオンと並んで、「のろわれよ、彼らの激しい怒り、彼らの凄まじい憤りは。私はヤコブの中で彼らを引き裂き、イスラエルの中に散らそう。(創世 47:7)」と言われた部族でありました。けれども、そこからモーセを出し、またアロンを出して、後に幕屋で仕える部族になっていくことを考えると、感慨深いものがあります。確かに、レビ族は相続地を持つことはなく、ヤコブが預言した通りだったのですが、そこに神の憐れみがあり、主のそばで奉仕をするという恵みにあずかりました。そして、モーセは後に、地上で最も謙遜な者とまで呼ばれ、これもまた御霊による恵みの働きでありましょう。そのモーセも完璧ではなく、イスラエルの民が不平を鳴らした時に、怒って、岩を二度打ったということをしてしまいました。少し話がずれてしまいましたが、主がこれからレビ族を用いて、主ご自身に近づくための奉仕の務めを行なう、その始まりがここに書かれています。

ここでおそらくは、既にファラオが男の子はナイル川に投げ込めと命じたことは、二人は分かっているがそれでも結婚をし、夫婦関係を持ち、そして男の子を生んだと考えられます。そして、三か月も隠していて、さらにはナイル川に投げ入れるふりをしたのでしょうか、けれども投げ入れるのではなく、防水加工のあるかごに入れて、誰かが拾ってくれることを待っていたということです。王の命令は、全てのエジプト人にヘブル人の男の子を見つけたら、投げ入れよと命じており、全ての人から監視されているとあって過言ではありません。そのような状況の中においても、それでもレビ族の二人の心と思いは、子を生まなければいけない、そして子を生きさなければいけないという思いが与えられていました。私たちが、世に生きている時に、「信仰を働かせる、そして恐れをも乗り越える」という決断をしていかなければならないでしょう。

このことの話、ヘブル書の著者が「信仰によったのだ」と言っています。「11:23 信仰によって、モーセは生まれてから三か月の間、両親によって隠されていました。彼らがその子のかわいいのを見、また、王の命令を恐れなかったからです。」私たちは、神の恵みによって救われただけでなく、その恵みによってそれぞれに信仰が与えられています。そして、その信仰によって、「これはやっちはいけない」あるいは、それ以上「このことはやるべきだ」という思いが、感情や知性をも超えて与えられることがあります。それにしたがって動いていく時、それは全体が動いている流れとは正反対のことであることが、しばしばです。

宣教地での話ですが、ウクライナで奉仕していた方がこんなことを教えてくれました。そこは元ソ連、共産主義の国です。共産主義や社会主義では、私たちが持っている倫理観とはかなり異なっていることがあります。例えば、学校の試験において、担当の教師が教室から離れた時点で、見せ合うこと、いわゆるカンニングは当たり前に行なわれています。けれども、クリスチャンになったある女の子が、カンニングをしないで試験に臨むことを決めました。つまり、圧倒的に不利な条件で試験に臨むのです。しかし、後で分かったのは彼女が最も高得点だったということです！試験で

悪い席次になったらどうするか？という恐れがあったことでしょう。けれども、主の前に歩む時に、大勢の人がやっている事とは正反対の事を行なっていく勇気が、信仰によって与えられます。

ところで、モーセが入れられた籠ですが、「瀝青と樹脂」で防水加工しているのが興味深いですね。まるでそれは、かつてのノアの箱舟のような防水加工です。それが、神の贖いの原型でありましたが、ここにも神の贖いの原型があります。後に紅海という、水の中を歩くことによって贖われる出来事を見ますが、自ら出て来ることが神の救いを表しているということを、水のバプテスマによって表しているわけです。自分に対して大水のように押し寄せてくる流れがあっても、それでも主は私たちを救ってくださいます。

2B ファラオの娘にある神の配剤 4-6

4 その子の姉は、その子がどうなるかと思って、離れたところに立っていた。

姉ミリアムのことです。ここへのブル語から、おそらく彼女は 12 歳とか、13 歳のぐらいではないかと思われます。彼女は、荒野の旅にモーセとアロンと一緒にいき、女預言者であったことが後で語られていきます。彼女が、モーセがどうなるかを見届けていました。

5 すると、ファラオの娘が水浴びをしようとナイルに下りて来た。侍女たちはナイルの川辺を歩いていた。彼女は葦の茂みの中にそのかごがあるのを見つけ、召使いの女を遣わして取って来させた。6 それを開けて、見ると、子どもがいた。なんと、それは男の子で、泣いていた。彼女はその子をかawaiiそうに思い、言った。「これはヘブル人の子どもです。」

誰かが拾ってくれないか？と思ったら、なんと、「ファラオの娘」が水浴びをしにきています。エジプトは暑いですから、ナイルへの水浴びはしばしば行われていたのでしょう。そしてもっと驚くべきことは、彼女がヘブル人の男の子だということが分かって、可哀想に思っていることです。その父は、ナイル川に投げ入れなければいけないと言っているのに、娘はその正反対のことを思っていたのです。歴史上においては、彼女はトメス一世の娘で、ハトシェプストと言われています。トメス二世の妻になりましたが、トメス二世は若くして死んだのですが、二世の息子であるトメス三世がまだ幼かったため、共同統治をハトシェプストがするようになりました。実質のファラオです。公的な場では男装して、顎に付け髭をしていたと伝えられています。

神は、私たちが信仰によって歩む時に、このようにしてこの世に生きている人々の心や行動をも動かされて、憐れみを示してください。ダニエルがバビロンに捕え移された時もそうでした。王のごちそうを食べまいと心に決めたダニエルですが、「神は、ダニエルが宦官の長の前に恵みとあわれみを受けられるようにされた。(1:9)」とあります。

3B 幼い時の信仰 7-10

7 その子の姉はファラオの娘に言った。「私が行って、あなた様にヘブル人の中から乳母を一人呼んで参りましょうか。あなた様に代わって、その子に乳を飲ませるために。」8 ファラオの娘が「行って来ておくれ」と言ったので、少女は行き、その子の母を呼んで来た。9 ファラオの娘は母親に言った。「この子を連れて行き、私に代わって乳を飲ませてください。私が賃金を払いましょう。」それで彼女はその子を引取って、乳を飲ませた。

ミリアムは、かなり賢い娘さんだったと分かります。なんと乳母として、モーセ自身の母を呼んできてしまったのです！そして、自分の母親であるにも関わらず、賃金を払ってもらえます。ナイル川でおぼれ死ななければならなかったのに、ファラオの娘という強力な保護の下、モーセの幼少期を育て上げることができるようになりました。ヨケベテは、この時に主にあって彼を育てたことは明らかです。モーセはファラオの養子になって成人しても、自分はイスラエル人であるという意識は強く持っていたからです。

先日、元同性愛者の人の証しを読みましたが、そのご両親がクリスチャンで、特に母親がとてつもない忍耐と愛によって、祈りを積み上げ、御言葉のメッセージを送り続け、彼がついに同性愛から解放されたという証しでした。このように、子を主にあって育てる熱意というのは、世に打ち勝つための信仰を養い育てます。「箴言 22:6 若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない。」パウロはテモテに対して言いました。「2テモテ 3:15 また、自分が幼いころから聖書に親しんできたことも知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。」

10 その子が大きくなったとき、母はその子をファラオの娘のもとに連れて行き、その子は王女の息子になった。王女はその子をモーセと名づけた。彼女は「水の中から、私がこの子を引き出したから」と言った。

ファラオの娘が、彼に与えた名もすごいです。モーセという名は、「引き出す」という意味のマシャから派生したものです。それが、彼の人生の性格を表すものであり、彼は苦しみの中にいる人を引き出すような働き、人を救う働きをいつもするようになり、人生の後半においては、イスラエルの民をエジプトの苦役から引き出す指導者となっていきます。

2A 楽しみより苦しみを選ぶ決断 11-15

したがって、私たちは世の流れと正反対の生き方をするに当たって、恐れずに信仰を働かせて前進するという事を見てきました。次の話は、モーセが40歳になった時のことです。彼はファラオの養子として、その宮廷の中で生きていたことは間違いありません。しかし、その豊かさと栄光、高い地位を、イスラエルの民の苦しみと共にするために敢えて捨ててしまうことを選び取ります。こ

れも、世の流れとは真っ向から対立します。

1B 救出の試み 11-12

11 こうして日がたち、モーセは大人になった。彼は同胞たちのところへ出て行き、その苦役を見た。そして、自分の同胞であるヘブル人の一人を、一人のエジプト人が打っているのを見た。

「こうして日がたち、モーセは大人になった」とありますが、これは彼が 40 歳の時のことです。まず、モーセがエジプトの生活をどのように過ごしたのか、ステパノの言ったことを引用します。「使 7:22 モーセは、エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにも行いにも力がありました。」当時のエジプトの学問は、世界で最高学府と呼ばれるべきものでした。そして彼は、「ことばにも力があった」とのことですが、雄弁であったようです。さらに「行いにも力があった」ということですが、非常に有能な人物であったことが分かります。これが、彼が、40 年近くの間、育てられてきた環境であったことを覚えていてください。

しかし、彼はイスラエル人の奴隷が鞭打たれているのを見て、「同胞たちのところ」と言っているのです。一度ならず、二度、彼らのことを「同胞」と言っています。彼には、イスラエルの神に属している民に対して自分もその一つであることを明確に持っていました。ここに、世に自分が生きている中で、特に大切にしなければいけないアイデンティティーです。アイデンティティーとは、「自分がいったい何か？」というものを、決定づけるものです。日本人は、これが希薄であると言われていいます。なぜなら、皆が似たような人々に取り囲まれ、自分がどうして他の人と違うのかということ、生活の中で問われることがないからです。「和を重んじる」とも言われますね。自分というものを持つことは大事とは思われず、むしろ持つてはいけないと教えられています。けれども、人間が自分を持つことは神から造られている限り、当たり前なことであり、それゆえに日本人たちには、「自分探し」とか、「自己実現」とか、自己を知るための欲求が強いのです。

しかし、自分がこういうものなのだ、ということを根底から持たなければ、それが岩の上に建てた家のように、洪水が来た時に耐久することができないのです。私たちは、キリストという岩の上に建てられている者です。「2コリ 5:17 だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」そして、水のバプテスマとは、イエス・キリストにつくバプテスマであり、その死と復活に付いています。これが、当時の社会の中では、ローマ社会からは偏狭な一神教として退けられる考えでしたし、その中で必死に自分たちを守ろうとしていたユダヤ社会の中では、同じ仲間にはされたくないとして、キリスト者は追放されていたのです。しかし、イエスを主とするということは、そういった告白でした。カイサルを主とすると言わずに、イエスを主とするのですから、ものすごい告白だったのであり、私たちにとっても大きな告白なのです。

12 彼はあたりを見回し、だれもいないのを確かめると、そのエジプト人を打ち殺し、砂の中に埋めた。

打ち殺すまでするのか？と思われるかもしれませんが、これはそのエジプト人のむち打ちをやめさせるなら、そこまでしなければいけないほどの現実があったのでしょうか？あるいは、レビ人として、かつての父祖が行ったように正義のためと思っているけれども、結局は、惨殺行為を働いてしまったと言ってもいいかもしれません。辺りを見回したというところに、彼には、自分がこれからすることは、やってはいけないことだという後ろめたさがあったように思われます。いずれにしても、彼は正義を行なうため、苦しんでいる者、虐げられている者を救うために及んだ行為であることには変わりません。ところが、その彼の正義の基準から、全く外れているようなことを目撃しました。

2B 同胞の喧嘩 13-15

13 次の日、また外に出てみると、見よ、二人のヘブル人が争っていた。モーセは、悪いほうに「どうして自分の仲間を打つのか」と言った。14 彼は言った。「だれがおまえを、指導者やさばき人として私たちの上に任命したのか。おまえは、あのエジプト人を殺したように、私も殺そうというのか。」そこでモーセは恐れて、きっとあのことが知られたのだと思った。

彼にとってはあってはならないことが、起こっていました。エジプト人がイスラエル人を虐めているのではなく、同胞のイスラエル人が同じイスラエル人を虐めていたのです。彼は驚いていますね。ここに、私たちが世にある戦いにおいてきっちりしておかないといけないことがあります。それは、「血肉の戦いではない、霊の戦いなのだ」ということです。自分が正しいと思ったことで、動いていくことはまさに肉の働きです。それによって、解決するどころか、モーセがそうであったように、問題をさらにこじらせることになります。

モーセはここで、たった一人のイスラエル人も救うことができませんでした。救うために一人のエジプト人を殺したら、同胞のイスラエル人から指摘されてしまいました。しかも、王の宮廷にいるのですから、権力があるはずなのです。しかし、何らイスラエル人に尊敬されるどころか、人を殺したことを訴えられてしまいました。しかし、この四十年後、モーセは自分で正しいと思っていることを行なったのではなく、主に言われたことをただ、そのまま忠実に行なっていました。しかも、彼は宮廷の王子ではなく、単なる荒野の羊飼いです。彼は戦いませんでした、しかし主が戦われました。イスラエル人、おそらく 200-300 万人いたであろう人々を救い出し、エジプト軍の精鋭部隊が全滅したのです。これが、肉によって神の言われることを完成させようとするのと、御霊に導かれて神のなされることにしっかりと留まることの違いです。

ところで、ステパノがサンヘドリンにおいて弁明した時、モーセについて話したことがとても興味深いです。「使 7:25 モーセは、自分の手によって神が同胞に救いを与えようとしておられることを、

皆が理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした。」モーセは、自分が神からイスラエル人を救うために遣わされているという確信がありました。そして、それを理解してくれるものだと思っていましたが、無理でした。理解してくれたのは、二度目にエジプトに行った時です。同じように、ヨセフのこともステパノは話しました。ヨセフも少年の時に、自分が支配者になることの夢を見ました。それを兄たちに話したら、彼らの妬みと憎しみを買って、エジプトに売られてしまいました。けれども、彼がエジプトの総理大臣になり、二度目に会う時は事実、彼らがヨセフの前でひれ伏したのです。ステパノは、ダビデのことも話しましたが、このことをイエスご自身のことに持って行ったのです。イエス様も、あなたがたによって拒まれたのだ。二度目に来る時は、ユダヤ人全体からメシアとして認められるということです。

15 ファラオはこのことを聞いて、モーセを殺そうと捜した。しかし、モーセはファラオのもとから逃れ、ミディアンの地に着き、井戸の傍らに座った。

モーセがついに、エジプトを離れました。この時に、モーセの心は平安であったことがヘブル書 11 章にある説明を読むと分かります。「24 信仰によって、モーセは成人したときに、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、25 はかない罪の楽しみにふけるよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。26 彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした。27 信仰によって、彼は王の憤りを恐れることなくエジプトを立ち去りました。目に見えない方を見ているようにして、忍び通したのです。」ここでモーセは、「世にある富や栄光」と決別し、「キリストにある栄光と富」に目を留めて、今の苦しみを選び取った話をしています。

まず、「ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み」とあります。これは先ほど話したように、自分が本質的には誰なのかというアイデンティティーの問題です。ファラオの娘の息子ではなく、イスラエル人と一つになることを選び取ったのです。「むしろ神の民とともに苦しむ」と言っていますね。次に、「罪の楽しみ」とあります。エジプトが豊かで学問が発達しているところであることは、話したとおりです。けれども、ここにあるように「罪の楽しみ」も数多くありました。不品行がはびこっていました。けれども、モーセはそれらが「はかない」とみなしていました。一時的な楽しみであることを知っていたのです。その時だけの楽しみで、自分に滅びをもたらすことを知っていました。そして、「キリストのゆえに受ける辱め」と「エジプトの宝」を天秤にかけています。キリストにある報いは、あまりにも、とてつもない大きなものなので、世における宝をも取るに足りないものに見えるのです。それゆえ、あまりにもとてつもないその栄光に輝く富のゆえに、むしろ今、一時的な苦しみや辱めを甘んじて受けた、ということでもあります。

そして、彼が信仰によって、王の憤りを恐れず、エジプトを去って行ったと言っていますが、その時に、「目に見えない方を見ているようにして、忍び通した」とあります。そう、この世界、キリストに

ある大いなる報いというのは、目に見ることができません。でも、それを信仰によって見るようにして忍ぶということです。これが、世において私たちが罪から離れ、時に苦しみや困難をも忍ぶための生命線です。

「ミディアンの地」とありますが、彼らはシナイ半島の南東部分と、その向こう側のアラビア半島の北西部分に生きていました。アカバ湾を挟んで住んでいた人たちです。モーセが行ったのは、おそらくシナイ半島の南東部分だと思います。

3A 小さなところに留まる謙虚さ 16-25

そこでモーセは、本当に小さな人間となってしまいました。しかし、彼はその小さなところに留まることに決めたのです。そこに満足しました。私たちにもこの世に生きていて、いつもと何にも変わらない日々が過ぎすかもしれません。けれども、そこに留まる謙虚さが必要になります。

1B 困窮者の救出 16-19

16 さて、ミディアンの祭司に七人の娘がいた。彼女たちは父の羊の群れに水を飲ませに来て、水を汲み、水ぶねに満たしていた。17 そのとき、羊飼いたちが来て、彼女たちを追い払った。するとモーセは立ち上がって、娘たちを助けてやり、羊の群れに水を飲ませた。

「ミディアンの祭司」とありますが、彼らはアブラハム、イサク、ヤコブの神はうっすらと聞いていたものと思われます。後に、モーセの働きを見て、確かにこの方がまことの神であることを、舅のイテロは認めることになります。そして、彼に「七人の娘」がいました。リベカの時、またラケルの時と同じように、女たちが羊飼いをしています。けれども、彼女たちは男の羊飼いたちに追い払われるような仕打ちを受けていました。けれども、モーセがどこに行っても変わりなく、虐げられている人々から弱い人々を救い出す働きをしていますね。私たちは、「私は神にこのことをするように命じられているのか、あのことをするように命じられているのか？」と悩みますが、結局、どこに行っても神に召されていることを行うのです。

自分が主のために動いている時、いつもいつの間にか行っていることがあったら、それに目を留めてください。そこに神の恵み、神の召し、そして賜物がある場合が多いです。

18 彼女たちが父レウエルのところに帰ったとき、父は言った。「どうして今日はこんなに早く帰って来たのか。」19 娘たちは答えた。「一人のエジプト人が、私たちが羊飼いたちの手から助けてくれました。そのうえ、その人は私たちのために水汲みまでして、羊の群れに飲ませてくれました。」

「レウエル」はイテロの別名です。彼女たちは、モーセによって救われたことを告げました。「一人のエジプト人」と言っていますが、モーセの身なりも、言葉も、エジプト人そのものだったのでしょう。

2B 結婚生活 20-22

20 父は娘たちに言った。「その人はどこにいるのか。どうして、その人を置いてきてしまったのか。食事を差し上げたいので、その人を呼んで来なさい。」21 モーセは心を決めて、この人のところに住むことにした。そこで、その人は娘のツィポラをモーセに与えた。22 彼女は男の子を産んだ。モーセはその子をゲルシヨムと名づけた。「私は異国にいる寄留者だ」と言ったからである。

モーセは、この小さな家族のところに留まることを決心しました。英語ですと、「モーセは、この人のところに住むことに満足した」と訳されているものもあります。彼は、神によって導かれたところ、それがどんなに小さなところであっても、そこに満足する心得を持っていました。そして、ツィポラという娘がお嫁さんに与えられました。「小さな鳥」という意味です。そして男の子を彼女が生みましたが、その時に彼は、良い意味で満足していない心を言い表しました。寄留者の音がある「ゲル」という言葉を、自分の息子の名に入れたのです。自分はここで寄留者であり、異国の地にいるのだ、ということです。

そうです、私たちは今、与えられているところで満足すべきですが、ある意味でいつまでも満足すべきではありません。矛盾していますが、この地は自分にとって故郷ではないのです。故郷は天にあり、そこに入るまでは落ち着くことはないのです、安息は天にあります。このことを常に告白していなければいけません。パウロは、そのことをピリピ書で、「完全にされているのではなく、上からの賞を得るために一心に走っているのだ。」と言いました。

3B 神の時と準備 23-25

23 それから何年もたって、エジプトの王は死んだ。イスラエルの子らは重い労働にうめき、泣き叫んだ。重い労働による彼らの叫びは神に届いた。24 神は彼らの嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。25 神はイスラエルの子らをご覧になった。神は彼らをみこころに留められた。

モーセの命を狙っていたファラオは死にます。それで、後に彼はエジプトに戻ることになります。それまでの間、430年でしょう、イスラエルは苦しみました。しかし、それは神さまがご自分が動かれる時を待っておられたのです。神には時があります。そして、その時には必ず契約を思い起こされる、イスラエルの地に戻すという約束を実行に移されます。

それまで、私たちが整え、心備えをされます。ここに、神の行動が書かれています。「彼らの嘆きを聞き」とあります。神は聞かれる方です。そして神は決して忘れる方ではありません、今、話したように「思い起こされる」方です。そして、神は見ることができます、「ご覧になった」とあります。最後に、神は心に留めておられます。「みこころに留められた」と言っています。私たちがこの世にいる時に、神は活発に私たちに気にかけておられ、祈りを聞かれ、見てくださっています。